高等教育研究センター
かわらばん
冬号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第85号

多様な学生を授業に受け入れるために

―大学教員準備講座（認定プログラム）の開始に寄せて―

ここ数年、大学教育についての研修やセミナーにオンラインで参加する機会が増えました。時間と場所の制約がない分、今までよりも多くの研鑽機会に参加できるようになった反面、集中力が欠けやすいと感じています。何よりも、対面の時は他の参加者とのやり取りを通じて、自分の中に散らばった知識を整理し、定着させていたのだな、ということも分かってきました。果たして、参加者のつながりや、講師を含めた「場づくり」は学習者にどのように影響を与えているのでしょうか。

数十年にわたる学生研究からは、大学へ強い帰属意識を持つ学生は、そうでない学生に比べ学習成果を維持し、向上しやすいことや、高い卒業率につながっていることが示唆されています。このような学生と他者とのつながりや、キャンパス内に居場所の感覚を得ることについては、サークルやその他の課外活動、友人関係などの「学生の社会生活」を想定して議論されてきました。しかし合理的配慮の義務化を契機に、「制度やしくみ」「アカデミック（学問）の場」における包摂性も問題提起されるようになってきています。

大学教員である私たちの教室には、多様な質や背景、環境を持つ学生がやってきます。学生にとって、授業への参加は大学のキャンパスに通う主な目的であり、教室の中で「受容されている」「居場所がある」感覚を持つことは重要なことです。仮に、学生が大学コミュニティから孤立し、教員や他の学生からのサポートがなく、安全性や快適性が損なわれていると感じた場合、大学や、学習経験とのつながりが希薄になってしまいます。

近年、国内大学において、将来大学教員を目指す大学院生を対象としたトレーニングプログラムの提供が盛んになってきました。名古屋大学高等教育研究センターでは、2010年度から2単位1科目の授業を開講してきました。センター設立25周年の節目となる本年度からは、「大学教員準備講座」内容を拡充し、体系的に構成した3科目4単位の認定プログラムとして新たにスタートしています。

「大学教員準備講座」では、様々な切り口から「大学教育における包摂性」を掘り下げるためのディスカッションや学習が含まれています。ある日、授業後に受講生の一人が声をかけてくれました。「今まで授業を受ける学生の顔が全部同じに見えていたけど、『一人ひとり違うんだな』と思いました。」その受講生のシラバス案には「実習では学生同士の相談や積極的なコミュニケーションを期待しています。」と記述されていました。

大学教員にとって授業で最も重要な役目は、最新の研究成果を踏まえた「アカデミックな知識やスキル」を次世代の学生に伝え、身に付けてもらうことです。そのための方策として、授業担当者として「大学教育における包摂性とは何か」を考え、実践していくことは、多くの学生にもメリットがあるように思います。学生の多様化は今後も進行していくことは想像に難くありません。私自身も、同僚の教員と大学教育における包摂性について真剣に議論する時が来ているように感じています。

時として、大学教員にとって、多様な学生に配慮することは過大な負担になることもあります。しかしその分、大学教員、ひいては教育者としての自身のあり方を再考する良い機会になるのではないかと期待しています。（安部有紀子）

グラフで見る名大生 [20]

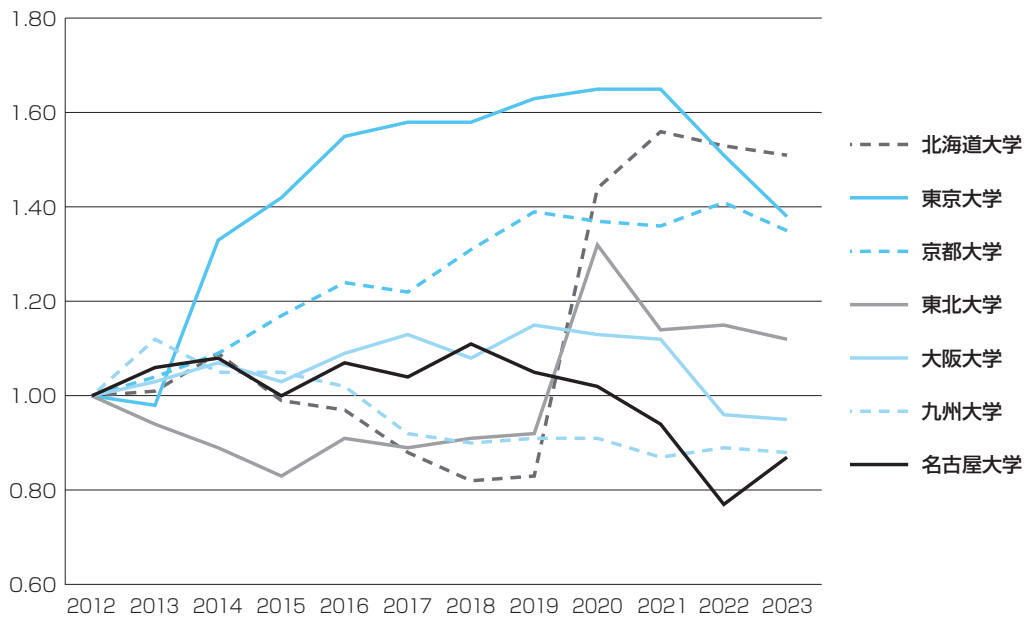
大学院における社会人学生の割合の推移

リカレント教育やリスキリングの必要性が繰り返し言明されるなかで、実際の社会人学生の数はどのように推移しているのでしょうか。今回は、大学院における社会人学生の割合の変化に焦点を当てます。2012年度の大学院生に占める社会人（修士課程と博士課程の学生の合計）の割合を1として、2023年度までの推移を見ます。比較対象として、名古屋大学の他に北海道大学、東北大学、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学の値もグラフに示しています。

2012年度と比較して、2023年度の割合が高まっている（1を上回っている）大学は、北海道大学（1.51）、東京大学（1.38）、京都大学（1.35）、東北大学（1.12）です。一方で、大阪大学（0.95）と九州大学（0.88）は1を下回っています。名古屋大学も1を下回り、他の六大学と比較して最も低い値（0.87）となっています。

また、推移の傾向にも違いがあります。東京大学と京都大学は年々上昇傾向にあり、大阪大学はほぼ横ばい、九州大学は緩やかに下がっていますが、2017年度からはほぼ横ばい、などです。北海道大学と東北大学は2020年度に急上昇しました。その後、北海道大学は高い値を維持しています。東北大学はやや下がってはいますが、1を上回る値を保っています。名古屋大学は、2018年度までは横ばいで、2019年度からは低下傾向にあります。

今回は、2012年度を基準として、2023年度までの推移に焦点を当てました。しかし、社会人大学院生の人数や割合の数値を見ると、今回とは異なる印象を受けます。これらの数値は、以下のURLから詳細を確認することができます。（https://x.gd/HI6tL）また、今回取り上げた以外の大学や研究科別の状況もご覧いただけますので、ぜひご参照ください。（東岡達也）



【データ】大学改革支援・学位授与機構「大学基本情報」（https://portal.niad.ac.jp/ptrt/table.html）の09go_Hを加工して作成。

かわらばんへのご意見・ご感想をお待ちしております。センターWEBページのフォームよりお寄せください。

ポスター発表・参加登録 受付中

大学教育改革フォーラムin東海2024

日　時　2024年3月2日（土）10:00～18:00　**参加費**　無料

会　場　名古屋大学東山キャンパス アジア法交流館（一部ハイブリッド）

大学教育をよりよくしたいという意思や希望をお持ちの教職員の集いです。今回も多様なテーマで分科会を企画しています。基調講演は戸田山　和久氏（大学改革支援・学位授与機構教授（兼）研究開発部長）による「極私的大学評価論：岐路にたつ『大学評価』」です。ご参加をお待ちしています。

詳細やお申し込みはこちらのサイトから　https://sites.google.com/view/tokaiforum2024/

大学教員準備講座（認定プログラム）の詳細はこちら

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/student/rogram/

海外における大学の機能分化の状況

文部科学省は、2018年に大学の機能分化に向けて、「世界的研究・教育」「高度な教養と専門性」「職業実践能力」の3類型を示しています。それが、現在の「国際卓越研究大学」「地域中核大学」等につながっています。

諸外国においても、大学の機能分化が進んでいます。平成29（2017）年6月14日に国立大学協会がまとめた「高等教育における国立大学の将来像（中間まとめ）」や国立大学財務・経営センター「大学財務経営研究」第1号（2004年）によれば、アメリカ、ドイツ、イギリスの大学の分類は以下のようにまとめられています。

アメリカの大学は、主に学位授与のレベルに応じた博士号授与機関、修士号授与機関であって、学士号授与機関、準学士号授与大学と、神学、医学、法学など職業専門教育を行う専門大学、少数民族を対象とした大学にわかれています。このうち、博士号授与機関から準学士号授与大学で全体の80%を占めています。そして、最も多い大学は準学士号授与大学であって全体の42.5%です。

イギリスの大学にとっては、1988年の教育改革法及び1992年の継続・高等教育法の二つの教育法の設置が大きいといえます。それ以前には、伝統的大学、カレッジ連合大学、旧市民大学、新市民大学、新構想大学及び上級工学カレッジ（CAT）から昇格した工科大学がありました。二つの教育の設置を経て、ポリテクニク、カレッジ、高等教育カレッジ及びインスティテュートやユニヴァーシティー・カレッジが高等教育法人となりました。これによって、1992年以前からの大学は旧大学、1992年以降に大学という名称を受けた大学は新大学と呼ばれています。

ドイツの大学は、幅広い専門分野に関する教育を行う総合大学、ギムナジウム以外の特定目的の基礎教育などを行う特別な教員養成機関としての教育大学、音楽・絵画・造形・映画といった芸術領域の高等教育機関としての芸術大学に加えて、神学大学、一般高専・専門大学、行政高専・専門大学に分かれています。

いずれの国においても、歴史的な経緯を背景として大学が成立し、時間経過とともに役割を変えながら今に至っているといえるでしょう。

（北栄輔）

センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせしています。本サービスへのご登録は、センターWEBページの「情報配信サービス登録はこちら」よりお申込ください。

Higher Education Glossary
高等教育にまつわる用語集

分野別教育方法研究（ディーバー）DBER

DBER（ディーバー）とは、discipline-based education research の略称です。訳語として、「分野別教育方法研究」という用語が充てられています。DBERの目的として、①学習者が個別学問分野の概念、実践、考え方をどのように学ぶかを理解すること、②学問分野における専門性の本質と発展について理解すること、③適切な学習目標と、その目標に向けて学習者を上達させる指導方法を特定し、その効果を測定すること等が挙げられています。DBERは、理工系の専門的知識と学習理論を組み合わせた学際的な研究領域として、北米を中心に急速に発展してきたところです。また近年では理工系に限らず、人文・社会系の専門領域にも広がりを見せ始めています。

DBERの対象は、大学入試で問われる知識や理解に止まらず、各学問分野の専門家が研究等で日常的に活用している概念や思考様式まで及びます。たとえば、DBERの一つである「物理教育研究」では、問題を解く計算力だけでなく、力学等に関する概念理解、現象の本質を抽出しモデル化する力、仮説・予想・実験・考察という一連の手続きで用いられる科学的推論力など、物理学の専門性に関わる多様な能力を扱います。そして、これらの能力に関する効果的な指導法を開発するため、学習者がどのような未熟な概念を有しており、どのようにすれば正しい概念理解を獲得できるのか等について、物理学の専門的知識や研究者自らの経験に基づいた仮説を立て、授業を設計し、実践し、効果測定を経て、結論を導き出すという実証的な研究を行います。

生成AIなど情報科学技術の進展により、学士課程教育、とくに教養教育で学ぶべき各学問分野の知識の内容や学び方には今後、変革が求められるかもしれません。大学教育において学生は何を習得すべきか?これもDBERで問い続けられていることの一つです。

（安田淳一郎）

読んでおきたい この1冊
Great Books on University

『面白くて刺激的な論文のための リサーチ・クエスチョンの作り方と育て方：論文刊行ゲームを超えて』

M. アルヴェッソン、J. サンドバーグ 著　　佐藤郁哉 訳
白桃書房　2023年

論文、そしてそもそも研究には、「リサーチ・クエスチョン（RQ）」が大切であると、論文執筆法や研究方法論についての数々の書籍に記されています。けれども「面白くて刺激的な論文のための」RQをつくるという観点は、これまでにはなかったものです。

本書において著者らは、社会科学にありがちな先行研究の穴を探して埋めようとするようなRQは、論文量産はできるけれど、先行する理論をなぞる結果になって面白い研究にならないと指摘します。そして、そのような「ギャップ・スポッティング」によるRQ作りから、既存の研究の前提に挑む「問題化」という手法により面白くて刺激的な論文への転換を提案し、適用事例を紹介しています。

とはいえ、すべてのRQが「問題化」により作成されることはないのでしょう。革新的ではない地道な研究が、データベース的役割を果たすような研究分野もあります。また、論文数という実績が求められがちな現実は、著者らも気にかけているところです。その結果、「ギャップ・スポッティング」風に論文を構築してしまい、面白さが見えづらくなることもあるといいます。

ちなみに本書には、「論文刊行ゲームを超えて」という、原題にはない副題がつけられています。論文量産ではなく、先行研究の根底にある前提に挑戦をしてこその面白い研究をしようという著者らのメッセージが、この副題に集約されているように感じたところでした。　（齋藤芳子）

高等教育研究センタースタッフ（2024年1月現在　〔　〕内は専門領域）

センター長　北　栄輔　〔情報学、機械工学、計算科学〕
教授　加藤 真紀　〔高等教育学、国際人口移動、知識創造〕
准教授　安部 有紀子　〔高等教育マネジメント、学生支援〕
准教授　安田 淳一郎　〔高等教育学、学習評価、物理教育研究〕
助教　齋藤 芳子　〔科学技術社会論〕
研究員　東岡 達也　〔高等教育論〕
特任准教授　松本 みゆき　〔産業・組織心理学、キャリア発達論〕
特任准教授　和嶋 雄一郎　〔教学IR、知識工学、認知科学〕
特任助教　竹永 啓悟　〔高等教育論〕
客員　Choi, Seung-hyun（韓国 忠北大学校）
朴澤 泰男（国立教育政策研究所高等教育研究部）
黒田 一雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科）
栗田 佳代子（東京大学大学総合教育研究センター）

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601　名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

URL　web.cshe.nagoya-u.ac.jp